

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520816

研究課題名(和文) 近世後期～幕末期の和市変動と萩藩財政の研究

研究課題名(英文) The Financial System of the Hagi-Han and the price fluctuation in the last fifty years of Early Modern Japanese History

研究代表者

田中 誠二 (TANAKA, Seiji)

山口大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：80116730

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、萩藩を事例に、近世最後の50年間における物価変動と藩財政の関係を解明した。この間に、貨幣価値は9分の1に下落し、米価が9倍に上昇したこと、藩札の増刷や産物取立政策と藩財政の関係などを解明した。

また、萩藩近世後期の財政システムは、一般会計のみならず、返済方・撫育方・札座・諸役所修補銀などの特別会計からなっており、この両方を見なければ、藩財政の総体を解明できないこと、藩の借銀のうち多くがこの特別会計からの借入れであることを解明した。さらに、明治期の藩札・藩債の償還について、萩藩を事例に具体的に解明した。

研究成果の概要(英文)：I make clear the price fluctuation in the last fifty years of the Early Modern Japanese History and a relationship of the domain finance. In this period monetary value is falling sharply and the rice price is rising sharply.

The financial system of Hagi-Han frame a system of a general account and special accounts. The most borrowed money is from this special accounts.

I make clear the repayment of local paper currency and financial obligations in Meiji era.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：萩藩 長州藩 藩財政 和市 藩札 幕末 維新

1. 研究開始当初の背景

萩藩(長州藩)の政治史研究は、幕末期のそれを中心に活況を呈している。それも幕末期に集中し、維新时期が手薄になっており、かつ政治史から政局史へと入り込んでいるように見受けられる。また一方で、政治史と対をなすはずの財政史は、三坂圭治『萩藩の財政と撫育制度』(初版 1944 年、改訂版 1977 年、マツノ書店)以来、あまり研究が進んでいない。この著作では、後期冒頭の藩主毛利重就の深謀遠慮によって設置された撫育方(ぶいくかた)があったればこそ、幕末・維新时期の戦費が賄われたと、撫育方礼賛の評価を与えている。こういった近世後期から幕末・維新の財政史研究の手薄さと、幕末期に偏った政治史研究の現状に対して、財政史の観点からインパクトを与えられるのではないかというのが、本研究の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、近世後期～幕末・維新时期の経済変動、とりわけ和(わ)市(わし)変動と萩・山口藩(明治1年～4年)財政の関係を具体的に解明する。当該期の萩・山口藩の研究は、政治史に著しく偏っており、経済・財政への視野を欠いている。そのため何が明治維新を可能にしたのか、とりわけ財政面での解明が俟たれている。本研究は、財政面から近世後期、とりわけ幕末・維新时期にまで踏み込んで解明することで、幕末・維新史研究にインパクトを与えようとするものである。

そのための、新たな史料の発見も本研究の大きな目的である。

3. 研究の方法

本研究の方法は、何よりも、藩財政史料の博搜による新出史料の発見と、それによるオリジナルな論点の提示である。

そのために、山口県文書館(山口市)に架蔵されている「毛利家文庫」・「県庁伝来旧藩記録」・「山口県行政文書」・「松原家文書」など、東京大学史料編纂所(東京都文京区)所蔵の「益田家文書」、毛利博物館(防府市)所蔵の「毛利家文書」、熊谷美術館(萩市)所蔵の「熊谷家文書」等々を検索し、広く新出史料の発見に努めた。

また、萩藩の制度・用語は複雑・難解であり、萩藩固有のものが多く、研究の前提として、制度や用語の理解が必要とされる。それには、地元の地方史研究の基礎知識の習得が不可欠である。筆者はこれまで萩藩を研究してきた実績として拙著『近世の検地と年貢』(塙書房、1996年)を持ち、萩藩の制度・用語にも精通しており、また、拙著『萩藩財政史の研究』(塙書房、2013年)で、近世初期～後期の分析を済ませており、今回の科研での研究の実績の前提となっている。

さらに、経済・財政分野の研究には、特に統計史料の発見とそれを図・表にまとめる作業が不可欠であり、ここにも力点を置いた。

近世の経済臣僚は算勘に通じており、このことが地方巧者(じかたこうしゃ)の条件であった。制度設計や運用面で数式が用いられることが多く、その中に制度の考え方が織り込まれている。これを史料の中から発見すること、および図・表を用いて一目瞭然に示すこと、がここで用いた研究の方法である。

具体的には、幕末期萩藩における3次にわたる藩札の増刷の実態を、新出史料を駆使して詳細に分析し、それぞれの大増刷の経過・特徴と問題点・結果を明らかにする。そして、大増刷をもたらした萩藩財政の状況と、大増刷が藩財政に与えた影響を見、さらには、当該期の社会変動と藩財政がどのような関連を持っていたかを考察する。特に、明治維新との関係は避けては通れない課題である。

領内米価統計史料の利用に当たっては、銀100匁に付何石何斗替えという表記を採用した。これは、米1石=銀何匁という従来一般的に採用されてきた表記よりも、近世人の経済感覚が表現されており、かつ米を指標として貨幣価値の変動を追求できる利点がある。とくに、近世最後の50年間は、幕府による貨幣の悪鑄や諸藩による藩札の大増刷、明治政府による金札の発行によって、貨幣的要因による激しいインフレーションが起こったことを、一目瞭然に示すことができる。この方法を提示したことも、今回の研究方法の特徴である。

4. 研究成果

本研究の特色・独創性については、

第一に近世後期の財政システムの全体像を提示しようとしたことである。萩藩の財政システムは、本勘と呼ばれる一般会計(これも地方=国元と江戸方に区分されている)と、返済方・撫育方(ぶいくかた)・札座(さつざ)・諸役所修補銀(しよやくしよしゅうほぎん)・御惱借方(おなやみかりがた)などの特別会計があり、この一般会計と特別会計の「引分け」(区分)の両方を見ないと藩財政の全体像が見えてこないと主張した。

萩藩の特別会計については、これまで撫育方についてのみ言及されていたが、返済方・札座以下の特別会計の存在は、筆者が初めて明らかにした。この特別会計は、財政を切り盛りする所帯方が、藩の借銀を借り入れる先であり、この借銀を「公借(こうしゃく)」と称した。公借には、藩主とその係累(「上々様方」という)や、特別会計からのものが多量にあり、「内借(ないしゃく・御用達商人などからの借銀)」と並んで、藩の借銀を構成していた。所帯方の借銀帳に登載されているものが、藩の借銀であり、公借(身内借りと言えり)が大量に含まれている事実を明確にしたのも、筆者の研究の成果である。

家臣借銀の公内借捌き(こうないしゃくさばき・藩と商人からの借銀の、藩による肩代わりと処分)と、所帯方による藩借銀の公内借捌きとが、天保期の萩藩財政改革の核心部

分であることを主張した。

さらに、公借部分の帳消し・凍結・準凍結と、内借部分の利下げ・年延べ(37年賦化) = 事実上の帳消しによって、藩財政を建て直し、文武興隆・海防強化に向かって行ったことを明らかにした。

また藩財政は「家臣を扶持する」という基本性格があり、藩財政と家臣団再生産の関係が後期に至っても重要であると主張した。

第二に、藩財政と和市(わし)変動の関係の解明を重視したことである。近世中期にも幕府の悪鑄と藩札発行によって、大きなインフレーション(物価が継続的に騰貴すること)がおこったが、近世最後の50年は中期のそれを大きく上回るインフレ状況となり、幕府の悪鑄と藩札の三次にもわたる増刷によって、米を指標にした貨幣価値が9分の1に減価(米価は9倍に騰貴)したことを主張し、当該期は「米を持っている者が強い」ことを主張した。

藩札の増刷は、文政12年~天保2年(1829~31)の1万5000貫目の第1次増刷があり、これによって、領内産物の買い占めと大坂為替を使っての正銀の藩への取込みを図った。この増刷は、物価の上昇と藩札の3分の2への減価を招き、天保大一揆の一番の原因となって、政策の撤回を余儀なくさせた。「後口銀」(うしろぎん、兌換準備銀)なしの増刷は失政につながるが多く、けっして「刷り得」ではないことを明らかにした。この時の藩札出高と札価、それに減収を数量的に明らかにしたのも研究の成果である。

第一次増刷の失敗を教訓として、安政5年(1858)から元治1年(1864)にかけて、第二次増刷が行われたことを明らかにした。安政末年からの幕府の貨幣悪鑄(幕政下で最低の純分率)によって、藩札は相対的に流通が可能となった面を指摘するとともに、和市変動の観察によって増刷のタイミングを図ったこと、「後口銀」を確保したこと、領内豪農商の取込によって産物取立・販路拡大への投入が行われたことを明らかにした。その背景には、隣藩広島藩の藩札増刷の失敗(価値の暴落により、40分の1、500分の1へ切り下げざるを得なかった)を教訓としていたこともあわせて指摘した。さらに、増刷による利益が幕末期の戦費調達に寄与したことを述べた。

第三に、維新期の藩札・藩債の償還に関して、山口藩を事例に一定の見通しを述べた。その都度の和市を特定したことも貴重な成果である。

明治初年に藩札の第3次増刷(出高13万貫目)があったが、和市変動の分析から、それは戊辰戦争期に戦費調達のために行われたことが推定される。

本研究の大きな目的の一つである、藩財政に関する新出史料の発見については、3. 研究の方法で述べたように、多くの史料所蔵機

関への文献調査によって、多量の史料を新たに発掘することができた。これら新出史料によって、萩藩財政史の研究は面目を一新し、今後の藩政史の充実に大きく寄与できたと考えられる。

その中で、特に重要なものは、本研究の成果報告書である『近世後期~幕末期の和市変動と萩藩財政の研究』(平成二十三年度~平成二十五年度 科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書)に翻刻した。山口県文書館架蔵「毛利家文庫」より「継立原書」120「安政三辰四月ヨリ産物一件及御聞物其外」22点、同「政理」166「安政三年御国産御内用控」、同「部寄」3、同「産業」47「産物事」(安政四年~元治元年)同「政理」163「安政元年ヨリ財政御仕組事材料抜書写」、毛利博物館所蔵毛利家文書「特別取扱書類」・「毛利斉元誓願文」ほか幕末藩主関係史料、萩博物館所蔵杉家文書藩制・地方関係史料など、新たに発掘した史料で、いずれも幕末萩藩財政史の研究に不可欠の史料である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

田中誠二

「萩藩終末期の産物取立と藩財政」

『近世後期~幕末期の和市変動と萩藩財政の研究』(平成二十三年度~平成二十五年度 科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書)

査読無

発行年 2014年

pp. 87~109

田中誠二

「萩藩の財政と御用達商人」

『やまぐち学の構築』第9号

査読無

発行年 2013年

pp. 1~24

田中誠二

「維新时期山口藩財政史研究序説」

『やまぐち学の構築』第8号

査読無

発行年 2012年

pp. 1~33

田中誠二

「幕末期萩藩財政史研究序説」

『やまぐち学の構築』第7号

査読無

発行年 2011年

pp. 1~25

[図書](計1件)

田中誠二

有限会社三共印刷に印刷・製本を依頼

『近世後期~幕末期の和市変動と萩藩財政

の研究』(平成二十三年度～平成二十五年度
科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報
告書)
発行年 2014 年
全 158 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 誠二 (TANAKA, Seiji)

山口大学・名誉教授

研究者番号：80116730